

医薬品のリスク
評価

小児・高齢者・
妊婦への配慮

薬害

血液-脳関門

- ◆脳に物質を移行させるかどうかを決める門番の役割がある
- ◆基本的に、脳に必要なものを通し不要なものは通さない
- ◆アルコール、ニコチン、カフェインなどは通りやすい
→中枢性の副作用が起こる

血液-胎盤関門

- ◆胎児はへその緒（臍帯）から胎盤を介し、母体の血液中の酸素や栄養素のやり取りをしている
- ◆胎盤にある胎児の血液と母体の血液とが混ざらない仕組みのことで、母体から胎児に物質を移行させるかどうかの門番の役割がある
- ◆母体が医薬品を使用した場合に、血液-胎盤関門によって、どの程度医薬品の成分の胎児への移行が防御されるかは、未解明のことも多いため、一般用医薬品においては「相談すること」に書かれている場合が多い

小児への配慮

- 血液-脳関門が未発達
→中枢の副作用が出やすい
- 大人と比べ、身体の大きさに対して腸が長い
→相対的に医薬品の吸収率が高い
- 肝臓や腎臓が未発達
→薬の作用が強くなる

「4週間いない子」と覚えよう！
4週間 いない子
(1) (7) (15)

【小児の年齢区分の目安】

新生児	乳児	幼児	小児
生後4週未満	生後4週以上 1歳未満	1歳以上 7歳未満	7歳以上 15歳未満



※ただし、一般的に15歳未満を小児とすることもある

高齢者への配慮

- のどの筋肉が衰えている
→薬を飲み込みづらい、誤嚥の誘発
- 肝臓や腎臓が衰えている
→薬の作用が強くなる

「老後」と覚えよう！
(65)

【高齢者の年齢区分の目安】

高齢者
65歳以上



妊婦・授乳婦への配慮

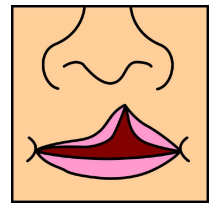
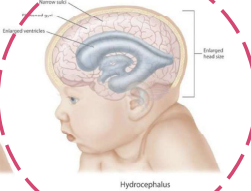
- 妊婦が注意したい成分
 - ①ビタミンA：多量服用で先天性異常が起こるおそれ特に妊娠前後3カ月は注意
 - ②刺激性便秘薬：流産や早産を誘発するおそれ
- 授乳婦が注意したい成分
 - ①ジフェンヒドラミン類：乳児が昏睡を起こすおそれ
 - ②アミノフィリン：乳児に神経過敏を起こすおそれ
 - ③ロートエキス：乳児が頻脈を起こすおそれ
 - ④センノシドやダイオウ：乳児が下痢を起こすおそれ
 - ⑤コデイン類：乳児がモルヒネ中毒を起こすおそれ
→使用を避けるか服用する場合は授乳を避ける



妊婦が注意すべき成分：ビタミンAによる先天異常

水頭症

口蓋裂



※先天異常の名前までは試験には出題されません